

アジア選手権大会 2012 2012年10月14-18日 中国・無錫

アジア選手権大会が無事盛大に開催された。日中関係がぎくしゃくした中、中国で開催されたが、日本選手が嫌な思いをすることはなかった。

2012年10月14-18日(日) 中国・無錫
アジア選手権大会 2012

男子リレー

- 1:中国 2 43:29-40:12-44:35(2:08:17)
(賀・李・薛)
- 2:中国 1 44:18-39:00-47:16(2:10:25)
(梁・李・汤)
- 3:日本 2 44:13-44:06-48:04(2:16:24)
長縄・櫻本・小泉
- 4:日本 1 43:44-43:26-67:54(2:25:05)
谷川・村越・寺嶋

女子リレー

- 1:中国 1 47:14-50:06-45:41(2:23:02)
(朱・王・ハオ)
- 2:中国 2 55:54-58:33-47:49(2:42:17)
(梁・施・周)
- 3:日本 47:18-65:52-50:38(2:43:48)
(皆川・新井・加納)



男女いずれも国別順位で2位となった日本リレーチーム
(左から、女子チーム新井・加納・皆川、男子チーム長縄・櫻本・小泉)

成長するアジア選手権

2008年に韓国でスタートしたアジア選手権も、今回で3回目を迎えた。ウェブの情報不十分だったことや、折

からの日中問題で、日本からの参加者は少なかった。一方、開催国中国からは500名以上が参加、カザフスタンや香港からも40-70人が参加する賑やかな大会となった。香港などは、1年以上前から強化を行い、事前にハルビンで合宿をするほどの力の入れよう。アジ

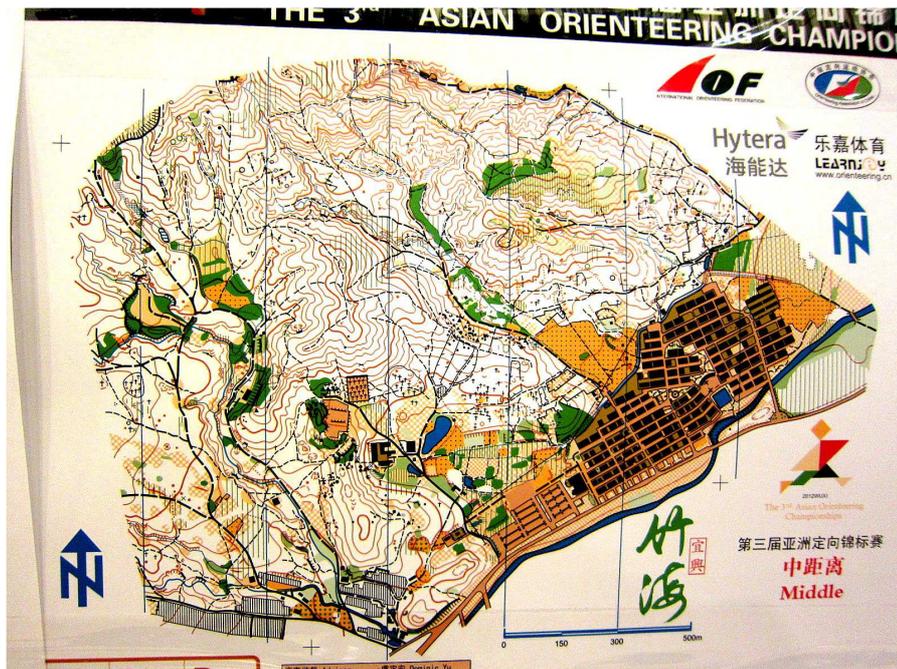
アナンバーワンを決めるのにふさわしい大会に成長しつつある。

日本からの参加は代表チームが9名、一般クラスの参加が10名。男子の小泉、櫻本、長縄、女子の皆川、加納は、いずれも今年の世界選手権にも参加した第一線で活躍中の選手である。前回の日本大会では女子が完敗している。ホーム中国で、彼らとどれだけ競えるかが期待された。

大会が開催されたのは、ウーシー。演歌好きの方なら、「無錫旅情」の無錫といった方がとおりがよからう。日本からの直行便も多い上海から100余キロと交通は至便。本州より南にあるが、大会が開催された10月14日から19日は、ほぼ日本と同じ気候で、絶好の気候だった。

皆川、スプリントでメダル獲得

14日のモデルの後、15日にはスプリントが市の郊外の公園で行われた。男子ではトップと1分30秒離れる6位に小泉が入賞、女子では皆川が16:01で3位のメダル獲得となった。トップの中国のハオ選手は13:33とワールドクラスの走りを見せ圧勝した。大型スクリーンに競技の様子が映し出されるなど、



モデル競技の地図。南の集落の西縁が会場。
リレーも会場は同じで、テレインは北東に若干伸ばした形で使われた。

中国らしい演出も行われた。

男子スプリント

- 1:李 16:15
- 6:小泉 17:45
- 11:櫻本 19:20
- 13:谷川 19:40
- 長縄 DNF

女子スプリント

- 1:ハオ 13:33
- 3:皆川 16:01
- 8:加納 18:11



会場へは直行バス 10 台を連ねて向かう。パトカーに先導され高速道路の降り口でも他の方面からの交通を一時通行止めにするというVIP 待遇は、中国らしい

翌 16 日はミドル競技。無錫周辺には山がほとんどなく、高速道路を約 1 時間半バスで走った場所にある竹林が舞台となった。通行可能度は非常によく、地形はところどころ細かい。日本の里山だと言われても全く違和感のないトレインだった。ミドルでは、男子トップはやはり李選手の 38:33、女子もハオ選手が 37:20 と一人ダントツのタイムで優勝した。日本勢は小泉が 41:51 で 5 位、櫻本が 42:23 で 6 位、女子は皆川が 6 位と 3 名の入賞者を出したが、メダルは逃した。またこの日は、M45 で田村選手が優勝、W45 で寺嶋選手が入賞した。

男子ミドル

- 1:李 38:33
- 5:小泉 41:51
- 6:櫻本 42:23
- 11:村越 43:52
- 13:谷川 45:26
- 19:長縄 50:12

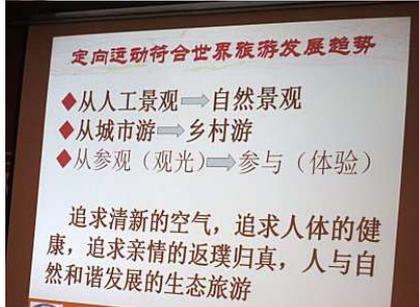
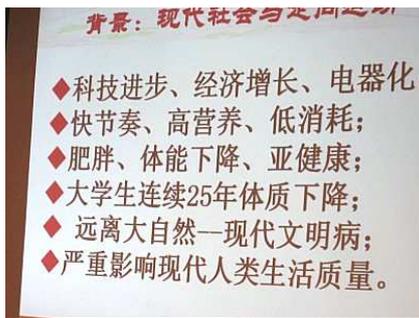
女子ミドル

- 1:ハオ 37:20
- 6:皆川 47:31
- 8:加納 51:08



M45 で見事に優勝した田村聡さん

翌 17 日は休養日で、アジア地域の連盟会議と普及のためのセミナーが開催された。いずれも発展途上にある諸国だけに、お互いに興味深い普及事例が提供された。中国はもともと学校体育にオリエンテーリングを取り入れている地域がある点が特徴的だったが、その他にもアドベンチャーレースや 100m オリエンテーリングなど、多様な種目で普及を図っているところが印象的だった。午後のセミナーは、主として地域のスポーツ関係者に対して開かれたものだったが、社会状況に対する認識やそれに対する野外スポーツの位置づけなど、一昔前の日本と全く似た状況にあることが分かった。



普及セミナーで、地域のスポーツ関係者に中国連盟の講師が話した内容。話は全く分からないが、こうして文字にして見ると大意はつかめる。我々が大きな文化圏の中にいることが実感できる。いずこも事情は同じ。情報交換は、お互いの普及活動をより活発にするだろう。

リレーは男女とも 2 位

最終日の 18 日はリレーが行われた(今回大会は、アジア選手権競技規則により許された種目構成によりロングは開催されていない)。男子は世界選手権代表組である長縄・櫻本・小泉の第一チーム。第二チームは谷川・村越・寺嶋、女子は、リレーだけのために新井宏美が加わり、臨んだ。男子は、谷川が全選手中トップで帰ってきて、日本チームを湧かせた。僅差でタッチした中国や日本第一チームの櫻本などがトレインで交錯しながら走ったが、走力で上回る中国はエースの李が圧倒的なタイムでトップに立ち、最終的には日本チームに 8 分の差をつけ優勝、女子はトップ皆川が中国と競り合いながら戻ったが、2 走で抜かれ、そのまま 3 位(国別順位では 2 位)でのゴールとなった。

リレーの日の夜は恒例のバンケットが行われた。中華料理の円卓を囲みながら 200 名近い参加者たちが一同に会する。レースを振り返り、再開を約束する。その賑わいを見ていると、2004 年に、APOC からアジア選手権へと大きな舵取りをした会議の事が思い出される。カザフスタンのウラジミルは、「APOC がなくなるのは残念だ」と言った。僕は「新しいアジア発展の枠組みが生まれるのだ」と答えた。バンケットの賑わいから、その枠組みは、少なくとも一人歩きできるくらいには成長したことが実感できた。しばし、この 8 年間に思いを馳せた。



チームをサポートしてくれたリ・ジさん(左)と小泉選手。バンケットにて。

次回開催はカザフ、そして香港

アジア地区連盟会議で、次回 2014 年開催はカザフスタンと決定された。カザフスタンは APOC2004 年を開催し、日本からも少なくない参加者があった。交通は不便だが、開催時期は 8 月 22-28 日と参加しやすい。APOC やスキー-0 の選手権開催の実績がある西部の Karkaraly を中心に行われる。多くの日本選手が参加することを期待したい。また 2016 年は、香港が開催に名乗りを上げている。

おしまいに

9 月 18 日に勃発した反日デモ等の影響で、日中関係がぎくしゃくした 1 ヶ月だった。

その直後に行われたパークワールドツアーに参加した谷川選手は 1 レースのみの参加で、ホテルでの待機を余儀なくされ、主催者の手配した飛行機で早々に帰国した。参加したレースのリザルトにも所属国籍は記載されていないという神経の使われようであった。

国を代表するべき地域選手権で、ナショナルチームのウェアも着られないのではないだろうか。表彰式での国旗や国歌を使うことも許されないのではないだろうか。そもそも選手団の安全が確保されるのだろうか。選手や JOA 内部にも大きな不安があった。

これに対して、日本オリエンテーリング協会強化委員会を中心に、中国オリエンテーリング協会、イベントアドバイザーなどの間で、密接な情報交換が行われた。その結果、中国協会は最大限の配慮をし、私たち日本選手一同は無事かつ嫌な思いをすることなく、

中国を後にできた。選手団に加わった一員として、この場を借りてお礼したい。

第一回アジア選手権前に韓国滞在の長かった寺島さんは、同大会では日韓を橋渡しする重要な役割を果たし、日本大会でも運営面で活躍された。「毎回大会にはおるけど、走るの今回は初めてや」と嬉しそうに語る一方で、緊迫した状況の中で日本チームの世話をするチームリーダー役も引き受けてくれた。加えて寺島貴美江さんは、連戦する選手に対して針やマッサージでサポートしてくれた。日本にも留学経験のある元中国のトップ選手リ・ジさんは、堪能な日本語で、選手をサポートしてくれた。選手たちがそれぞれの力を発揮できたのも、彼らのサポートのおかげである。

(村越 真)



日本チームを物心両面からサポートしてくれた寺島夫妻(左側)と日本チーム。



ゴール後回収された GPS。エリートのためではなく、迷いやすい初心者のリスク管理だという。



「ノース・コリアの団長さんからこんなものもらっちゃったよ」と困ったような喜んだような顔をやる韓国の A さん。もらったのは、朝鮮民主主義人民共和国の旗のバッジ。確かに、国に着けて帰る訳にはいかないだろう。